勢城日記稿 一

特別
ル3
3981
2

勢陽日記 二

文政四辛巳年従七月廿六日至八月十九日

勝間田茂野

勝間田信民氏蔵書

廿六日ありのやの君古卿へ檮つゝみをおくりけるふみに
六月（ミナツキ）の十五（モチ）よりも照まさる程てありし
たのしやいつとなくて文月のてるひのこの世に
うちかへりぬらん

廿七日てつけより そはきのなかつはつねくなるやうに
錦織翁（ニシコホリ）素洲の椋本の庵の花をおもひ出しそれより北へ
一里斗に山本村といふありそこに式内なる鈴鹿郡椋本神社
いふありけんと椋の神といふその社の前に椿の枝に檮
の葉ふまりて生出る樹ありといふを吟ておもひあはせける
ことありけるかたはら増上寺のやんことなき御霊殿のこまへに

是より先樹のひともとあり枝さしかはしたるに檜椿といふ
名におひたるやうにわかれありけるに椿田の神垣又同し
郡なる高宮村の神の社のまへ又同し郡北畑村の山本より
其樹のみなかれたれありときけは是なる樹なりあるは汲として
宮くひ家の中には猿あまたし椿ては其名を負てかくしな
名椿ともいとおほしといふ山家村の南に大きな汲村ありそこに
神名帳に小野の汲郡小岸神社おはしますとききけは
椿なる小岸の神をいと深くおもひてまうらんの
心はありと山田の京神社やとえ詣よらん日のこゝろの出立ん
ならのまへなれはそこより帰りきてとふらひ来らんとおもふ
境勤在地一の宮の下底なれは蝉の声耳にさし

あてなるやうにきこゆるに
蝉の音はたえてかゝる水と空なりせは涼しくてあらまし
このうたとりて
廿八日寅の時頃より暁近くなるころまて
くさくの虫の音をきゝつくしてなかるゝ枕をもあはれ
みいりて村雨ふり出て虫の音はかれはれと枕のもとに聞き
なかすの声のこゝちそへたれは
ちほろまほろたゝよふことにのこし置て雨にぬれり
むしの声く
廿九日辰の時斗より雨ほとはふりたる雨はなくなく
晴てゐて例のあつさに風をまつのこゝちするそせり又雲

渡て風あまた出ざり時雨のなごりに柿のきをあらく
棲處しらぬこのちれはのはふしぬるをみて
ことしは秋や海方の柿ともしるしゝて秋のあはれを
まつ法なかなり時雨の紅葉に錦おりなす牛のたぐひを見
さまかしさるにやうそてつまもかいさらねいふらひ致らそたく
牛の数く
毎日なふいは風いたあらし夜ふけて村雨そそく亀や海らふ
ふよりやうれ人ゆくひなるまいはい野のくぬぎ小野武内の神を
何られとも尋ぬるに須磨郡の武内にまつりかく紀いあらしと
いふ石神社のそまつりしの故事扱と石太神（シヤクタイジ）といふ石山
[illegible]
とうろに此のかつる見て

かさなるにしまゐかん川渡し宮龍くらへすの宿
紀さいの宿に泊りし
八月朔日あさとくよりあめ降り出て風あらし
なふ出ともひまなくつ雨に風そよぎてうちて空をかさぬる
旅のやどりか
二日きのふの雨のなごりとて雲いよくちれやらねと
雨そふらす東須は山田の宿へ出ざんの心つまつ時雨の
為にけさ紀の川ここきはまさらんこそをかしとて東ふ
のそなり東須は須磨川のなかりつ瀬あるこのひ川をはる
あとらふくあり
おとらにぞていまふさをちかふらね須磨川むかひはるせの

あさくあ袖のし
三日寅の時斗 百合の君とかるとりよかく出らるハ名
十治川の川上山田の原の神垣をとひまゐんおもくり
度包さ波をさしてたとりゆく此中に於ハ保めてと明
つる小の野とらふ地をこえて清幣川の下つ瀬を歩り
わたりすゝみてさやりなる園山をありの尾かせの
家よりたゝ出らかるして野保野をこえらに尾張守比
野を廣瀬野とらふハ此あたりに廣瀬村とらふ所あれは
志ての名ほせむりとらふ右にあたる塚とらふ塚二つ立てらひ
らるをみて
廣瀬野にたりひらちたる百年のこゝろ塚あなたひとらん

景行紀四十年 日本武尊 …… 續日本紀 …… 伊勢 ……

こゝろとえてありし時りこて前につゞけて西の方の高塚山
とらふ出あり園中波あり此中波をいかし月七ま西をみて
北畑をとほしのなふハ又東にみれて棒下をめぐりて高神山
の鈴音大悲者 あるに右に高安村とらふ所あり和名抄に鈴鹿郡
高宮美多加也とあるもこれなるへしこゝに鹿山とらふ園あり本居
氏も是そは本武尊の能褒野なるへしといはれしのなにさる
あるへし此高作つくひハ古事記傳といふ書にくはしく
いはれたれハ出るまでもなし 褒の棒をめぐりてある
この墓のれにハ此陵を十二の后尊の神さりまして
たかねにて更まつりてまつる所なりし塚なりといふハ
例のあやまりなるへし白鳥塚をあやまりて七

此より塚又茶臼山といふ其陵のいとつよくみちやくゐひ給さりかしを
こゝみちゆふかり古る此年 景行天皇四十三年にありるところさて其の陵[illegible]
白鳥となりて陵より出ゐひ大和国琴弾原にとゞまりぬふそこより又
白鳥となりて飛さりゐひ河内国舊市邑にとゞまりぬふ其所に陵を作る
ことは日本書紀にみえたり 大和の琴弾原 河内の白鳥陵は 葛上郡[illegible]そのなくありや
なりしや しらん
[illegible]河内国舊市邑といふは古市郡[illegible]白鳥塚を
古市郡軽墓村にありとぞ 其所に其陵を軽墓の墓といふは その名にかなひて
[illegible]又軽墓村のをはりつけに古市村ありぞとみ 白鳥大明神 社号を伊岐
宮といふかとは伊岐谷にいますを誤てかく云とぞ 軽墓村のあたりかなで
伊岐谷と云たりとぞ 河内の白鳥塚の[illegible]名ありしも此村[illegible]をめくりて
[illegible]
[illegible]

[illegible]

陵の[illegible]かしとゝれ其の広山のにぬきして
ゐるとて[illegible]
東路のみこし こなくしよろこへし 君かいさなて
たれのあふかのぬ 古市陵の一野南に蓋蔵(カサトノ)権現といふ社あり
瘡(カサ)はまれいつれのいたつきをまれのさされたなやめるよりを
よてこひのみなれは 病いやとなんそのしるしのしこといちりに
花表を作てむくひなるとぞ 拝殿に白鳥山陵蓋蔵
といふ額をかゝけたり 実は古市陵の拝殿なりしを
まつりし社となん 今は蓋蔵といふ其の文字を
ありひあやまりて 瘡の病のねきことをかくるはいふ
そや 国つをとめ 始(クモテ)そちさ 此行 濡れ[illegible]からう

して石薬師寺の三町計西にあたり石薬師あり
や一紀石ありと唱て様々なる事をいふ法師に
いざなはれてやがて法師なりを出るまゝに先
みちの左よりたてりける石に薬師のかたちを彫
たるなり其石を左より右はら八さの計もあるらん
忘れ侍る難石といふものに似て白き石也
うちつゞきて
東のかたの観をあらひ出ねとはいのちの北
見かたちかゝれば石薬師の驛をはいですて右に
おれて坂路をありのぼりて山邊村よりは此村はいらい
川の北の村をひかえなり万葉集に和銅五年壬子夏

四月遣長田王于伊勢國齋宮時山邊御井作歌とて
し書ありてその歌に
山邊乃御井乎見我氐利神風乃伊勢處女等相見鶴鴨
やまのべの御井をたづねけるに村の中に田あり其東の
林に御井のあとありといひ傳へたる古き筒井あれと
それのあるかたのかはよりかくたりかゝれしも本居宣長も
あつれによる紀にのる出流井あり山邊の御井をそれとは
あるねのといふそれらはよし水のなかに出る井を為るに
在家どもいふ氏のあるのまゝありといへるそうとまりて井は
とゝしよく照まてり流くまゝれと水いつれもせて井桁の
上かゝまて涌出るなんとよりしつらねこたの事とはえられ

くり水をむすびあぐるにいとよき水なり布居氏のかたはら
おかれたるごとく山辺の佐井とよぶ此井なり（のこる）
おのれ紫微翁（春海）は神路山のあたりに山辺の佐井はあらま
ほしきをいはれしを布居氏のかたへおくられたるにあなかし（あはれいはれなし）
此国の南に式内添上郡大井神社おほ川ま[illegible]此国の人
古のあとありけるに古島といふ村ありそこにも大井
神社いまは八幡宮といふありいづれのいはれにかありけんさだかならず
かくし家より東に國分（コクブン）寺ありとききてそこにまうでぬ
とて東のかたに十五六町に國分寺ありてそこを[illegible]
まつは添上郡といふも寺の法師に天平の古かねの堂
の跡ありて（いまは古き堂の跡なり）それより北三町斗にありとぞ畑となりて

（天平の）古き尾をと出るといふ（式）此村をやゝ過て国分（ぢ）村といふなる
らとかし庭を（物うく）十となれぬ百合宮の君高園の墳の古は
語ふをと見るやと思ひまふ庭のりはなかなかねはいと見るまゝや高ね
本田村（ゆう）過ぎこのさ川を出なり渡り越ゆ此あたり高ありしは清くは
たる為に水まさりて庭のこゝろも志るねはかしこまことときり
なりしこのさ川より南を十（ト）宮（こや）村といふ村にて神戸の市にいる和
名抄に河曲（かわわ）郡神戸とあるはこゝなるべし　こゝは志ばしやすらひて
矢橋村より三角と紀家とも紀尾備包廣か祝ぞかたにたいめす
（その）此所は（の右に）鎌倉権五郎景政の墓といふ碑をたてゝ（の碑をたてたる標石かた［illegible］）
いふあらん景政保竹の国まで思ひとてそのまゝんえて
鎌倉権五郎景政（大庭より西南四五町斗に添ありて墓といへる所あり石塔［illegible］）高倉郡樋本村に景政の墓といふなる
（その墓の［illegible］は［illegible］にて景政の墓といふ）

ありとのみ聞ゆ常盤の墓なりんとありしか其墓士の家
いありとのふいうけかりし　おのれハ玉垣村の森田氏にとひて
あれハ百合の花の名ハ　君にとはれて　堤の勘兵衛か家をとひて
やよ矢橋村の花の田中に式内河曲郡矢椅神社おハしまし
たち添ひたるをたゝえて　玉垣村なる森田氏か許にとゝまり
あまりおもしろけれて何それとかたる人に問へはちかきハ三
とはんとて立出て玉垣村にいたりて鴫垣村といひしを東海道
次文治二年八月廿七日の条に伊勢の国玉垣厨とみえたり鴫
垣といひしハ文治よりも上つ世のことなりけんとはかりぞ延喜式にハ名ある
河曲郡弥都加伎神社あらはれたるを安なれとみな
そこよりほとちかき田つらをわけて式内河曲郡土師神社

まゐりて浜の村を土師村といふ北の方にある佐那の云
かり申の時斗に至りつきぬ家居浜方にて浦のま川風
浜のおとに心を浜りて
いとう汁のおとこしきりけハ是なり松のま川是
いそのしる浜子の時より潮のむにおのれハむけよのまねき
ふみの屋なりつれハ家の柱をとる
四日甲の時伝聖朝ゐの出て松原をたど
つたふ花の浦かけ雲のむらちかうあかねの海士の屋や
そうかしらぬんかつかうかいとんかくれきたなんなる
い勢のうみの浦の浜風あふかなきて浜よりおとるふ
あまのよひこゑ白子といふ所に出て式内久留真神社を

さてまかるに大路より西三丁許に大寶天王と申神社なりといふ
それを久留米神社なりといふそこに到てぬかつく其南市橋
町といふ所に又久留米神社あり此はちかき代よりなり
此社を福徳天王といふこれはあらはれ出たる事ありとある年の
春日の夜守数田何某の久留米神社へまうでて人のまゐれる
杉のかしこ十まり七つの神の名を額といふものに書
かきつけて久留米の神社へなりしことあり其の額と申すもの
こゝりや見つけんと見えたるに拝殿の長押にかけたり
其の面は桜の板なるとありおほかたのせしこその始は
あるある額のたまはけや其形のなさと
あんいひたる額おほろけれは其のことの始は某某某某此

和名抄伊勢国府在鈴鹿郡ニ国府アリト云亀山ノ東国府村ハ和名抄ニイフ国府ニテ今某村ニ三千石斗其地廣クニテ村円商人多シトイフ

あかりをたつねて久留米の庄といふ神名帳に奄藝郡久留米神
社とみえたりまことの久留米の神社ハやゝそれ此社なそおりしまた
久留米の庄といふ所は東ハ津北ハ中山村をかぎり西ハ亀山の東国府村に
至る北も高国川をかぎるとかやいとひろき所なりと白子ゑん何某
のいふ其の頃高凡十万石もありけるとそ白子の東ハ海方ちかく
して八五丁餘北ハ十五六丁餘なる白子の南の方につゝきたる
立花やこゝりいといひて若松よりおくりなきとゆる
文治三年三月廿九日公卿勅使駅家雑事伊勢国被仰下之
といふ条の中に粟真庄ハ国積司廣元まうしうけたまはり
寺家村の観音を安置したり是を世の人ハ白子観音と
いふ田中松原をへて大別保村の左一町許に武内奄藝郡

尾崎神社男波あたりの浦方にて松のむらく
立てるあたりより沖つ白浪たちかへ立さはりて心ゆく
ながめなりけるといはんかたなくめでたしや
上野の岩をめでてかごとらんものに家ありて津の岩をたゝく
あのつ津といひしとぞ岩の岸田橋より東の海西を見て
名残さ流垂水村をすぎて古所の東さ多く星合村
といふありてそこに星合の社は男波とゞくれは立よ
らん心はあれどたゞ風あらく高まり出されはうちすく
てそこを雨岩とたよりてぬれかはいふ世話すいさんかく
松坂まてとて急ぐに雲出川は風たけしくて
深し舟をとゞめたり舟出にせんとして舟出に擬くの

舟人棹さしてむかひの岸にかゝりしてつかね松坂まで
おりひたる風にあふりて流れくれは六軒茶屋町に
いそきにやとるらん三渡村といふあたりん雨風の音いや
ましにたけし松の並木によりていそきねは松の木もむか
雨はなほふりたるかくたゆまんうら
五日つとめて六軒茶屋町を立出るに朝日かけの
うれし右にあふか山をへだてゝ櫛井といふあるしの
碑かちかゝれは右にあされて一町斗ゆくにさゝやかなる家に
松のもいつかはそりあはれなるなたるかたはらより
立ち出る家ありこれを見たれはとらふゑたかより
斎宮の里やへのよかる見るれ井のあとを尋ねて

一 喜多(?)…（朱書）
禁河(?)所…
仏(?)加神社…

志よ流よおち井ゟてちよは あらしとおもふつゝ あれとこそいへらし
されハいさゝ河よつの雨に櫛田川の流れ橋にて渡り舟渡へ
なりとぞ松坂の宿なる大和屋かり宿(ヤド)る六軒茶屋より
宿りて七の日一里斗となんなふいよつゝ己の付まゐらねと
何君に(?)をおくしんのこゝろ尋らんといひしをきつゝとてなり大
和屋いとしきとのなをつけしくふりてつゝねて清くなり
その新室(ニヒムロ)のほがひにてやしろひなる一枝(ヨ)二枝(ヨ)の藤の
やとりをも清らなる此いへハ見むかしの家に付
ふ源か軒字ハ本居宣長のよめる大嘗會の長歌を本
居大平よ師のふみをめてゝよんなる長家をかけそへり
あるハ大平ぬしへつゝそこゝやひらのなる人なりやそそ

酉より出たる子に出けるのなくなりてあたりの海老を沈くして酒肴
魚と添へあそびゐなまうとこといひちんかうなりし 又むかしよりを蒲焼(カバヤキ)
といふもののみにて出せるこの宿の前にもそのするとはいえくおぼえなり
おのれハあるしをよびむかへて本居春庭よたよりさくかをよ
と出なのきこえたる流よら斗なりて出りし時たちの五十斗
南に西居小倉たにまうさる所につどひて本居健亭もまゐさく
とゝせいて後の国ありのたまふうくひらせて此のつゞきの時
あくる此大和屋この宿に泊る
六日宿を出よりて風はげしき折ふしあつしたかのせし
春庭のあるその妹うくといふ女文殿村安宅がちあるもいそ
むかしよりにあつめておこせたる春庭ハめでたくひらる人なれハ

時まゐりて志ちゐさくをこのまゝにて法庭ハ本居宣長のまな
ここにて歌もよくよミさつさをうたれなんなれとめしひされハ
ちのこの父のかなしすして宣長のちうへ子
稲掛大平其名をかまへて後の岩山になりとよぶ名をも継きて
やとりて弟次小俣子いきらんと次にいひ清水啟ハ都なる
何のし啟の姫君よりさ志ちまりなかひしとて江戸の大城の
女房にちちその姫君をもつてなんなりし旅人の深ろなふ
尼のついでに神なりや海山田の京の宮称なりそしなふ
とてらんここに有りなかひななふ小俣よりのゆかふと女かに
あのでのともちのおもらんとする小俣の宿ハてよひと海ろな
旅 お名なりとらふなれ居のさうちとまゐしに梅のかとかるをま前大人

さくおこのやのあかし君のよみなうりしハ
花ちらしさくらやいつと来きてハちるをかなしみ
そむらるる折節義亭の廊ハ此を
かろんへて此君とおもてはのおもとちかつきひしとつけよ
ふれかくれさらん未の時計百合のあかし君北畑なる
堤女しおのれともに（此君の下のあるつかせる）津六のお家に酒のみて家女にふけり
ちかひもので さくらとせなるに あるひからのあそう
よそりつとひかれいんにあされあそぶるに出あほとろへし
かかる旅人の秋の後のやとりに斯ありきの世て学をお
くるをなりいひとはいひなかくいとあハれなれハ
みひくらふ此ハらおよるのそ作らんにちらなへさらさらね

人丸社これとよらん出るまゝ百合若のあそし君あそびよ
このりて返し
さらにむかふ財なるよ市の川中にふとうは戻
出をいうるこのあるの山の西さ落ち流こゝよほし坂田海
るも乾燥いとあやし竜の瀬升 大和屋のかに流流
七日つとめて以出を流よ雨小走つ第り出くり 掛川をこて
櫛田の宮に流石のかゝるにあほよやのたゝる樟の
掛(キ)出とてり甚掛(キ)のりとに[illegible]よ河神たて神名抄に多氣郡
櫛田神社とよめえるは是なり 和名抄に多氣郡櫛田終之と
あるはけさとこり
ちらも櫛田川の堤よりちて
旅出とのけつらよ戻しまくした川心あそてつ家

[illegible]

さてきよくり蛇川を舟よりわたり櫛田の川本よりふかを
るて稲木村なる涜祓(ミツキ)川又竪流蛇川をら多気川ともいふ
とそ川をわたりて稲木村佐川村たんとをとて宝国坂り
一亭らるよ斎宮構の前に延宝道の比出よのあまりなりし
人の出る前あり 大南文范とらふなし やさしれいその前
をとらひにあつち[illegible]こそもれりとちぬ斎宮(サイクウ)村
のたにあくち神さびる杜ありあくまりるかろにさく
やこのたるやうりをいつまてくれるは斎宮(イツキ)おかしましし
大宮の跡なりる
野よあり ていく出くる戻らん 是やこのいそのいはつぼの
あ浅うやとあり其あはの走のとひよあほあやったる

[illegible]

唐銅のあミた仏(ホトケ)おハします古きものと見ゆこれハ由緒より
あるんと思ふまゝ法師ぐへあるさりけり雨ハふりきたりけり
やまの際雨きたりて好紀きこれハゑまこそ頃なりしところに
花のつぼミといふ草ありと清水夫人さるかたかくりたるを
見たれハそこにありける神宮屋熱田八といふ人のかたにて
こゝ見えて花か浅き左橋に植させて山田まてあくゆ
出まよし野おもく仁人此等の紀をとむど紀といふ所
里この茶屋といふ家にいたひてそこより左になれて岩
おほくの家伊を出とりて広らかなる田の面をゆけハ中大
淀村に至る家明星よりとゝまて三十町ありとおもへん左ハ
なれて十町斗りにさゝぶえの橋といふありその橋銭

ゆくに松あまたたてり
由紀すさまおとをとゝ行しまゝまへの坊を見送りけり
さゝあえの森 右になされて川にそひてゆけハ此川よ
いまへのさゝぶにの在りけりともと人のいふ多気郡
竹佐ゝ夫江神社ハ此あたりにあるよしをいひまたこれてなし
此万治の頃 此国の山田出と延佳神主の
同じ人の五十嵐貞文大淀村のうちに五社をあらため
これハそれのよしかくりて相倉村なる清霊の神社
いふ社ありこれたの多気郡櫛倉神社も佐々夫江櫛倉
とりよ或内おりましける むかしふるきとりて又
中村淀村に至る左になされて出ろらちなる池をめくりて大淀

の浦に出るに若松生出て海のなかまでいと遠し
東にむかへの方は海や海もなかうり海もちかきを経
大淀のうら
いせの海のなごりありに大淀のうらのまへにてこの辺
人もありけるを
ここにおほよどの浦にふねよりあがりてみるを仁人業
平まつといふ伊勢物語を書たる中将の自ら作り給ひしの
とおもひとむらひしにこのところなどよりも謂をたづねしにあなりしん
是なるにや伊勢人のいひつたへたるふるしを
多気郡の式内なる竹大与杼神社大淀祇とも
の額は倭姫命とあなり大淀橋をわたりて右にまかれて

明野の原を過ぎて斎宮をたちて小松と小笠のこなたより
葉のあるにまにおりいやしつつかしむかひに朝熊岳
むら雲はれゆくあはひよりも又雨いたくふり出たり
中の村より小俣の宮に出て平坂をやとる抜村
あやまりしてとるあひだに東さへ出す
八日よべの雨に宮川のみぎはまさりて渡し舟渡されざ
なれどもやうやうにんをのせし[illegible]うれしかりぬなりに
はるかなりの古[illegible]に[illegible]をとひもんとて百合[illegible]のあり
君[illegible]何某（与三助）といふ人の案内者をやとひてうち出るに小
俣の東より右にまがれて[illegible]町辺に式内度会郡小俣
神社あり[illegible]社[illegible]ちかくより右なるは八王子社右なるは

小俣の神社はそれより南なる宮川の堤よりちかきに濁りて
流るる水ハいときよく猛くして流るるやうなりけり
その宮川のわたし場より西へ三町ばかり左にかゝりて左にそれ
てゆくさきやゝのぼる社ありこれより本のかたありてそ
ふるし此處の本つかさなる離宮院の古き跡
あり豊受の皇神山田の原に鎮りまし給ひしをりさなから
かくなるをおもふにより
まつりしところなるべし今もなほ其処の跡
みなそこにありしをいふなりさやかに其のさまなりけり
さて昔ありし書の中にも其書の名をあげて誌せり
まつりし離宮院の古き跡は此外の小社

あり其小社は式内の社おいまおほるを菊田者いうり志らい
あれと式の注をつけたりといふ其は離宮院の跡なり
志すに垣をもちめぐらしてそのうちに榊生ひたるを植
ゑたり

榊　葉の字をあてたるはいみじくもさかえたる　の
ところどころなりしは其をもて世をわたるもの多きと
いて九十六町ばかり宮村ありその田中に千川の石といふ
石ありさしわたし一尺ばかりもあらん其石をさしてこの
ところの名の源俊頼朝臣湯田野に千川の石をよみ給ひ
たりそれのあかねのよくも其ねと湯田の人すで濁
野のもちなれハいつまりとも思ひたらし今人のいふむかし

こゝの石をうらんと流るに血のあとはつきたれハ血川の石と
いひ流るへうりとらふハ例の語をしさとあるつし　千川の石
といふことは古きやうのなる石を注つるへきさんとするに多くの
人々流といひて出てたるのことは千川の石といふ事ハ万葉集の歌
まれあるよりそこより北へ五丁斗　此湯田村に在る和名抄に
度會郡湯田郷といへるいとふるき名なりそこより湯田
田中に橋あるうたそうる妙あり　そこをへ一町ばかり
志流より少し左に湯田神社おはします神名帳に度會郡
湯田神社とあるこれなり前なるその氏神をまつるなりハ
いくらひも村ぞよてくるしかりけり湯田の神社より小俣の
岩へ廿六町ありとぞ　未の時のかゝりに平井より伊勢百合会の

あり君雨流るゝのつれ〴〵に題をさぐりてうたよまんとて
さまふみそいよみおこせたるをといふ百合合の君ハ芸薹を
橋にさるも日数をふれハきりく次流れさせて
来るも宜しく　文猿君旅愁を
橋本の松枝ともなし　くさまくらかりねの夢を
今しむすふとも　おのれハ秋の名を
さくねたり　秋ハさうらうよ　神のくるまをかける
弟のやふるれよる猿を
桜とる君ハちとせにこそれともあるハあれし
とりのここのつ郷
九日よへより雨ふりて宮川をわたるへきなと

なかりなる山田なる長橋にあるのつゞきハ佐渡に某已
の町斗とうつりきて玄川の古つ勝をはなりて二見の浦へ
茱内せんといふをゆるそくられへるもちつれにハ小俣の名
を出て下小俣村といふ所より舟にのり宮川をくだり川尻
にハよかへりて舟にのれりおもかしこしこのよつせむ
旁棚迄まてゆくよ御布
新のほとおりひのほとりあたり旁のえん水とを
うちにかくりくり茱島丁といふ所より出て右にはなれて東
大谷廣といふ所に式内度會郡大間國生部社あり東の度芸
東に三丁斗に清理井庭神社吉つまりのまへにても式内の仏部と
新町といふ所よりかくといふのまゝのかをりかちやのいと友達

川崎といふ市をまつるとハ堂近の船まる水門(ミナト)なれハさち
おほうるふとて行くて左の浦方なるかに海士の絶ゆくる
立のほるるさんて
あほそこにりしほのるふり立のほりそふるあめの
雲とちなるらん志いひ川といふ川あり此上ハ五十鈴川とぞ
むかひの岸に朱の玉垣見ゆるを人ハ昨宮と云稲荷
の小社なるそ五たる志いひの流しを舟なりゆくれ志いひと云ハ
しほあひの流のあらふてしらとまて海より続きたるところ
かくいふなるらん山田原村三津村あるといふて二見の浦のあたり
なる一色村あるあたりハ和名抄に度會郡二見と見ゆ
えうる白はたなるへし一色村なるといふてあたりなとおほくて三枝(ミソギ)に

中がんとより松原の右は太国玉比売神社つゞきてぞ志らの
社あり此社を度会郡の式内なるよし言へ浦へ出ぬ
ほとに雨もおとろかれて晴て海つらをゆけは海をへだて北を
みやれは東よりさし出るは三河国いらこか崎西よりさし
出るは尾張国智多郡野間の内海とふとぞ源義朝相氏長田の為に
るは此紀の入海をへだて
うたれたまひし所也そこに御墓とありて大御堂といふ寺
もありとぞ則まうりたまひし湯浴の跡なりも三昧堂なと
まのあたりみえしは旅人のかなしき義朝相氏の
に法堂をいとなみてかのせうと平泉国のつひに康頼
国のすまおける義朝の住まわりなふをあはれとおもふより

水田三千町をその寺によせて後の世をとふらひけるとぞ
くひは文治元年七月十日鎌倉の二品より阿波国麻殖
保司をたまはりしの保をたまはりしこれこの浦の坊方
より西八町斗に宮あり神宮の御塩殿といふあり松の木
いや高きによきかたちなるかなあなたこの浦より
富士のやまのみゆるよしをきゝて待くらしつれど
つゐに雲たなびきてねはせでかへりたるなし千里の外と紀
こゝろをとひ出たるこのさらすまる心つよさなれはこゝろひとつ
おもひしらひたなりける海のこなたかくいとおもしろう寄
まていとやみそきせんとて人々もおのれもうしほの中を
およくもいでつゝてあそびしておきつ方は出こなる

ならし　ここよりゆけハ破方なるありいふよのたかきやなら
そこにおもむくところのいつこよ貝ものを商ふ家並
又一色村ゆ伊ろに長橋のつゝきのひんく佐藤板事あらはまうけ
すみのことふみのにのりてりよ欠出る西の風耳雲
あれて名目さやうに名がひかより川端といふ所より山田へ
といそくにけもされたられハとりいでてらして山田の金
本町長橋長橋宗豊受の皇神の
あらりあられハらきひる十端の川上に天照皇大神と
豊受の皇神に大津神楽をなんとはあらくことよとふ
らひしこなり
十日のひきのよの雨ハたゆりもなく晴てゆけなきふハ

神路山山田この京の神垣をとふらひなんとてとらの
出るところ豊受の宮神をおがみのつよなあ
足もとのやまくの京のありおあ神をうりさめのとは
いのりやはそる昔とひらてそうりしハありとせあまり七とせに
ありぬれハ大宮のあともさくにみえ有りうち次山田の京
の松のむらさとよらんゆるをとありひあはせかり松の本宮
ゆのふりて植ゑん昔のならなりん宮治のと急く
岡本妙見町古市中ノ地蔵なんの町なとをこそて間の山と坂
路をゆくにほうひの方にれともむれもちて路をとらせよと
とふよんこよ路をりのそてやらにかくうはほうひの女あや
しのにてさらしとふよ今あされて路をとゝ

國ニ国ニ與ニ流ル宮ヲ五十鈴川上ニ朝ニ禰宮ト則大段大神宮ニ奥ニ降之處也と

いと奥ありて宇治橋よりものはま川の御瀬まちて棹の
まよ酒を渡て渡をちふ人あり橋よりおとしてとせる
たかさすとりゆるは時まきに浪まれるとおもひし
宇治町

和名抄ニ度會郡宇治

宇治町
そこをすぎて鬱御神の大宮をされば五十鈴川の川合に
ありとちて人口をそよてつきして神路山に松
の末のち山田の原よりも山田の原の神垣よりいれるもちや
はかしそちの大御神の宮まいる社は宇治路て
なりまるさを見わたしにちまき宮を経てそもおのれ
萬理をかくさにおのつゝまなる心地浪百會の

作者歌數ニ
西行法師
俗名兵衛尉
則清敬位
義清法ニ

あまてる君のみちをおもひてそなんとのみかれいその
ふしを神司にて坂垣のさしつかさより内宮の祢宜
まつへ翔をもちてやうてふ朝なりしあさられ出をみいり
かるそ萬くもかゝりしもなくもと行くるをあまよなるよ
あの宿を宿とや御世のよん紀伊憲清のこのことを都のおもひ
あはれさらり志りしはるかになりて
あはれかしこすめらぎ神のねぎしろきよそて夜清つまよ
とこの伝ふなりしのおもふはなはけの宮てあさまちく
斗ろそあせあえて末の附斗山田なる長橋の行百合
會のあまり君なふ古市とかいへる坂のあえひとりのうさ
ちよよのひをえんにせうんとの坂ふみ北畑なる境ぬし四日市

崎なる府下田の江戸なる竹芝ぬし深来何某がもとよりお
くれとありしかずさともにいざなひて古市なる津屋り
いざる道のほどとふむろのかたへに酒やかなどもてなして
人々忌ひなりけるほどに足ながくよびける糸竹にはれて
あそびともつどひて足さへなほよびをなどかなきなりの
まていとめづらし又あはれ星なる梅壺のりなとよふらん
とてりつまづ松の尾といふ也てらある出居にいてあそびて
酒のさかひに興おほかりし例のことさをなほなほなり
散るまでかくにはんて心のまゝの
十日豊宮崎の御書庫にきのふ長橋何某ら
なりちまて従四位下御代弘訓神主のもとへおもむくのよしを

いひつぎ給ふ御文庫をあはせありてよろづの書ふみどもおほかれば甚嬉
しきなる古き書やたから物など見もしたまひ長橋の某ぬしつのひとへ伝へ
何某とぞいふなるはまづ御代ぬしの家にありて何くれと
ありしままにけふよりありしをもてなして中山の
林なる御書庫にあるところの御図書のさまて古きは気多も
らんしるしとて御代ぬしのいはれにあまた山岩戸の御
ありけるは海の頃よ天の岩戸とていふにかきてあるなる
さと思ひてこれぞ天照大御神神世の昔とませたまひし岩
戸なりとはいひて諸国より参りつどふる人のとはさるなり
ふるにけ岩屋をおしらせ給ふに古き墓にのみぞあと
ひて祖のみかへらひける山田人のいふをきゝて伊勢津彦の墓

のおふとらひ侍るへかりとて宇治山田のあたりなるはとく八百
のけれとてかのいそすらいふさうをあつし国よりあつく些
伊勢の大臣弥清にとふへをけられる岩屋へいれてうつし
けるのしるいいかまそや昔あれなる岩やなれいる
出いとい及南に鞍ヶ嶽因て書る及こる所書庫の大
屋に豊受の大宮の称宜なあの生出し檜垣度安
のかえる也とりところなふつし植るりというその出とり
そい教そひて生立てれい法生の後をおもひやるそそ
かし細代ぬしよつ後ことを出ゝるまでとり出る當書
の奥書とかいはけるをみれば仁平元年六月廿五日
中別次少納言入道摺本之釋文見合了下略又應保二年

四月廿六日又建保六年七月九日又正和三孟夏なる又貞享元年
甲子の夏四月十日とあるよりいれもおもつ方に出来よりとゝの
ひ侍りぬるのまつて年朔のことをしるせり此尚書は泥前の
国為家をおもへし守屋のことも納め置ひしと仁平の奥書
に少納言入道とあるは信西入道は俗の時
世におはせしの平治の乱よ山城の国綴喜郡田原郷なる所に
かくれておはしまるを右衛門督信頼うゝまをつけてうせぬれはそのあと
は同しくなる大臣寺村の岩のかくされてあるとかふ此尚書は
出に出かりしとやいちん又田原家ふを書ぬへし二のあたり
あるにいとつきつ安のかのとんも出て付くるてをあとし
国ちる四日市とらかゝの大ちるちつの人のちゝ侍るへかし

長さ五寸斗の三条宗近の刀なるよし

をこゝになりしとなん又清文庫のうちに伊勢太神宮と
あはれやつま書ふるを額にかけるは後陽院の宸筆
なりとぞ其の外にもくさ〴〵の書や刀やとり出て見せられ
しのおどろく斗の物もなかりしに出ほど見せられしは仁斗の奥
書しける尚書のまきなりさま宗大人清水の君をとし
の秋 [illegible] 書ともえなりしむくひに [illegible]
よせふそてよつりし [illegible] 書との名を傳のしるれし 板に [illegible]
にうけゝり宗大人はあやしみおもふ志つくりてりのひるひと
ちんは逍書序をたても書をたてんうそまるしへはいかれ
の書にまれむかしのひに有るを例とするようをは延年の例
あくる汐田中を立行てせ紀ちとふ本に [illegible] 山路の湘潭

宵入て雖たかれは古市に出でてむかし伊勢宮のうちをとふ
前のみちを [illegible] 奉は此里にあつそへあ家なりとてよむ
しろに [illegible] 様とふ額をなかされたりけり秋の夜すら
にんに何の出てかへるに君をわかむらん おのれは北畑の
堤と柏尾やとりし中らつけをたち出て日
のさかれは日のくれまなくまであらそいてとふくまとのへ
このりて
りくりの雲みな流るよ中そるともみのとるとひ
秋なのつすれそ秋の夕りをで双燕楼とふ高をみちは
をられて
たうとうの浪もちのる出られてはあけやうと紀の

夢て去りぬ秋は浮めぐとしらきもくよも橋より頭
十三日なふは大神楽なるよしのねて長橋よりかよ
それは出居のかくうらに白木綿門かくらし其中に宮
大神楽(オホカグラ)と豊受の宮神と二柱の神をいはひまつり白幣(ニキテ)
あらかくうりその左はいとかしこきそのあり其の堂一口を
すゑてゆきをとめとて出る女をさそそれは年官よはぬそ
ち七ちちちおりしはちちちちこちちちおり乙女(ヲトメ)とはいとをさなき
女をいふとめておのひにおいまだいはれてうたかふみたる（かしらに雪をいたゞくのおうな）
老姥(おむなおむな)よ孫うりされはをとめとふ老のその名をいはるる
甚老る女女を七十なり古ねさに涙とりそてありし
これてなりその老ろになりありあまつりて神楽を

うちならし笛を吹きならして神楽をおこなふなり（白木綿）
楽をなすそれはあるし酒さかなとり出て何くれとあるし
ありけむなふはかしこでて只に心を清くしてすゝり
とんとあるしのたちうちのきをおりひやくまそかし
宅なりて経あやしくるとおのれも豊受の宮神に大
社神楽をなしかしこまりにとて山田の社にまゐる道は西の
や海よあかねなむ吉市たちるとめのよ浮まへ
ふるき雙甍楼のおりまにちうゐして日のあのうるる
にふるしの旅をそて
むかしの清のなき秋のつゞみ...けり
初の旅の姉

其日はふしもあつさらんかうし　あ〳〵らを申出せんの心まゝ
「なれハなつまれとんあ王さしくは日を見やしねとよひハ
御の相やをとりすて津辰のたかとのよ百合若の君北畑の
堤ね御こし竹芸人おのれかるとりよ推れ下さ竹芸人のさく
とうせんる　あそひかくなのハいつてまつあつさんその床やて
と淡しててやまはよたちまそて　ふすうりとおちうりそ　足たるむ
しろるよ　ありとあん何おりひ出てかくつれなくハ女のそん
とおりふに竹芸人出とり好佳のとふかあさちに床を
やうて斎をなのおあのしるをえんて　其の々よかりてら
かる
見ても柁なくさおかねんつまか許に見出とりねの

秋ハのつれく
西国へふ立出んと思ふに従四位下堤西釈神主百合若の
あつ君とうちひろふ酒代かの方とらりつゝひそて
おれる君のかりとへふりかけおなとせんかり　北畑の堤ねし
と竹芸人出て口のれて立出ぬとかうし得るに日暮くけれハ
あ〳〵様とあて立出んとも稀何某紫おくとも青は風は
おて方法〳〵惟ハくれかるおろより御の相をりとふてひ
なねあろあか人のふたとひまてさくとせなるあそひお
うけのハ釈のいつおを古ゝをとあらぬ経ま堂と
なとうりなるを出にふつねうし　ほいなかれんことを
おりひとりて男にうりてよるへる

旅すてらひなる人なきまうちひの日をむかし
家に出たり ありし人のいふらくことよひさることせざる
乙女(ヲトメ)は二八斗にて不幸しかるに川井の家のいやし紀堂と
よりぞのもかくれてありたる今こひはいとなる人の子なくの
あらんとするに父ハ此をなよりののすかたの由なし
ありて をなよとしなれさせてかひてあやしのかたらひ
みせをあくる むかしといふをまたにいとあはれなり
いやし紀ありけに不ななる人のあるんハ兼しもその桃
の花あそし あらひてあさをあつ暦よ
十五日の朝ハあいさつありて出るる不なハし をやそられと
家ハ経墨ある長橋氏にみえんとしをなきて己の時

ありき これ(てう)人の篤麿といふ女のものにて立出るに
あなふありかなかる 経墨し宮川を舟わたりて斎宮(サイクウ)村
なるより伊勢村 さてうけたまはりしあるをはらけの御堂に
法師ありけれハ此仏のなるる文字ありやとといふに
なりといふ金剛坂なるなる大南氏をたづねてありけり
たいめ寺経りて松坂なる大和屋なりやとる廿日頃の月
清くれハ百合宮のありし君例の法六らをとに花のきの
あはれもとりて出るさよひハあさく かゝれハたとえの
まのほとりて白橋を帰りよひもなくてさくらとせる
酒ハ宮におとりなれとも魚ハあさくなし 此家の西に
いほちち山その西にほりはやあ ゆ酒なの手にいんなり

うちの秋の海よつよ秋よあらはれてさらに今宵
ほしさかのや後秋のあるるをもて あらそひて大和尼かり
侍る宿の時斗 おほいつるに月影はよひちうちまて
かゝ宿よ久れい
宿とらひし老のねさめのゆくよいかゝあるその
月秋もなり
十六日 ほのくらくとあくる比おもひをむすひてうちいつる
に此なる又もとひる宿ほしくて
あり侍て みいくるひもとあらん出よまつさかと
きくにつけては あつきはきみのよこゝろゐるなり 彦
濱おきるて 津の宿に至る 又輔 焔魔堂あり

甚东百六町にあるよつ浦あるとやうと出とりといんもさら
らいし久れいやうね 高茶屋上野の宿を経て白子より
右よあ作て濱方後らひよりよ久ふ太細をおほしたり
とて海士とも 寺法とひて いろくすを得るいなるし
北若松なる濵佐世ね いの宿にてらひやとりて磯方の
まち夜にありうちてあそふ波ぬ風にちりてよ川風秋な
あるさ寸十六夜の月 海のさくつよ出かり
よをはかれね月のこうあねのあやよいまよ波ぬを
いかるくりらん名りまてせるえうして子ね
十七日 きさは浪音より翌日のとよさかの海をとらへ
ほしとあるらまより例の磯方の雲霞よえりかけ

をちこちをみわたすあたりに風といふもののなかれは海面
たひらかにして雲のかゝれる山もなくしも見渡されて
見渡さるゝは尾張の国知多郡の崎此国の朝霞
志摩の崎めちのかすみさやかし
とくふねせはや海の浪もあるは篠島のさきの浦のあはれを
あはれてちくそえれ 風の吹く海面に海士の小舟むかへくるまゝ
出てより あさなぎにまつりをとくられ 又沖にこぎよせて
漕ゆくもなかし 此村に式内河曲郡 布施田神社 村社
は椎とふくみおくまりて[?]みあゝらいとかしこさ 社
の陣家に鈴鹿郡の嶽野原の山くまそこに見えけり
高山のあたりは雲かゝりて尾上はほの見ゆる又高嶺

万葉集の家の説 本居宣長のいふにもとつけり

雲にへだてられて襟の袖への涙もぬるるは あはれなるものとなるに
なかんずく秋のもみぢよろしく 和名抄 伊勢国河曲郡 布施田（布加田）
心あらん 志きりに 志ぐるゝまて 其の名をまふ 布施田のさとといふは此名
雲ちらんとなりて ありとは布施田の[?]といふ 延喜式にみえ
たる布施田神社ここに鎮座せは 今は布施田の神社なり
なかんずく 布施田神社 いますせは 布施田の里の跡を
見し 万葉集六に 妹をとひあるの松原といふ所を此松
其もとりなりといふへあれと 朝明郡へ行ほとの所の
あての松原は 吾自松原と五ツか目をもて誤る 初句は松かゝる枕言葉こそ
いはれくるに松原より地名とあやまりといふ 巻十七 吾背子乎吾松原欲見渡者
とも詠れは此説よろしく 中の時代の古を立出て 漢涯よりそこと定めて

岩とるに笠田村といふ所に式内河曲郡名を志佐神社とあり
のあやひは志つかりと侍りて南なる村といふ浦方の
ありむかしの浦とよばれはやそこにたつやしなるの浦
を若松といふてあたり侍る此村の西に式内河曲郡須岐
神社田中にありて侍ることなり田つらの浦をたどりけるに
東の稲方のまつのあやひよりさし出る月の清かなれハ
あま川なかれてちて出る月をみつつ
あかねさすこのまに北若松村より小川をわたりゆきて
又そこの浦にかひて高岡川の舟瀬の月をよみつつ
かち渡りす（中村）
この村清まつまもるかたにこそ秋の夕風の

あきせしつねて衣とたもとつゆ絶むしの声きこえて
秋の秋のあはれのあきらきりしをおもひて
これまつとおもひきこそなかん秋の野にむかへあはれなる
むしのなくし園の村はなり汲浜村なる山中何某の家に
一泊
十八日宿の主あつまれて之浜辺まで送られける折ハ秋風衣被ふ
おほえて
露こそもかなたの清々の出渡とみて吹入る雲雨
あまの夕ふうせしを稲山中何某の家にやどる
十九日宿の村升にやありかん朝の浜をあるに出侍田甲
をこして玉の堤を分ゆく所に玉垣川板橋をわたるとて

右にはなれて川にそひてゆくにやがて三重の采女村にいたる村
中より右にはなれて郡町村より式内三重郡加富神社園の前
のところは北東海道の大路なる杖衝坂は水路のところ也
ともに出てきしなりて古道なるをいふこゝの杖衝
坂は本名なれども采女村の北にある大きなるみちよしのすこし
さにある事をいまり采女村より北に杖保理への坂
路あり是なん古の杖衝坂なりとおもふなり其後路
右の傍にて小松を分かりて杖保理は采女のうちにて
三ちをへだてゝ鹿間村にいるまゝやり坂の陰にある
まへつくゆの嘆出る路を
云々をかくしてはいろをいのちふれしのあやしかるまてぞふ

名はおいせなん杖保理をうけつるに言る様忠の意を
伝よ紛れ毛まで後を巻く菰野山中のこゝに其ところの式内
桑名郡多度神社名神大といふ社のかたはらに一目連
といふ神とこゝにまします社なり神をまつりにおやよりて一目龍
といふ其神はおりしにかれては雲をよび風をおこして日
なきに出ることなる龍の雲井をかけるなどいひきたれて
倒のあやしきことみてたるへし多度にもとむかしふりし
いふ街の出るをあらはれしとは今たま下富村の寺地出ろうらり
見るべきは酒のかゝるあれりて菊の花しつかたらふなる
鷹登山その頂に大悲者ゆゑ寺の名を鶴足山野登寺
といふをその北につらなりたる山には石大神山をき添山

太寶山と荒神山とのあはひより孫ヶ嶽ハ東にそびえ立り
谷のむかひに古枝の松林の峡ふかきをわけて百合会のありし石
にありとて
古きことをおもひいでてうちもとより君のこころよりの
跡をたづねてわけて長浜村に至り付にいたりし又月
とひし人とも武備の昭和をとはひなんと名を漬
一丁斗をへて神垣に至宿し松枝をへて行さひさり
さゝやかなるところのあたりつよ武蔵国多日村なる新田義
貞君の墓のおほあらて長坂小山ともめぐりのさまを
のこれ跡日本武尊の御陵のあとを神主も心にも
年ふりていひさだめとあんあのれ此塚をみるに其の墳は

ありしとおもふところの墳ハかくさてやそのまは併
ふりやまの御墓ちの君の御陵をみて長府の倒をも
おもふにつけておもはり其縁に流れるを石の山のまにある
いれ出羽のいはその墳をはあやしと申府氏のいかにし
もうきさることをにおもひ定むる此月ものひとひ来し宮寺
の塚をそのところの白鳥塚なるんかし武備を宮をも
御し漆原の郡にて出とる理保理のうちにあれはいつの世よ
りか武備の塚を君の御陵なりと謂をつたへし
事し宮寺と武備の古るの塚をみしてえ
るとそんあるところのおもふところより来中武丁
斗長浜の村中に此門漆原郡長浜神社あり

所常川をこえて山路に分入り北畑村なる陀仏のもとに

午の時斗至り流くあり赦への ほらんと流れいたの

おとらかあかりなし